

特別支援学校における教育実習の充実に関する研究 3

養成大学の教員と特別支援学校の教員相互の専門性の向上をめざして

矢口 明

（名寄市立大学保健福祉学部）

KEY WORDS: 教育実習、専門性の向上、連携

【はじめに】

特別支援学校における教育実習（以下：教育実習）について、矢口（2019）は、2018 年の北海道特別支援教育学会において開催した自主シンポジウムの結果と H 大学附属特別支援学校（以下：附属校）の教員を対象に実施したアンケート調査の結果を基に、教育実習の在り方について課題を明らかにした。また、矢口（2020）は、北海道内の公立特別支援学校（以下：公立校）の教員を対象に実施したアンケート調査の結果と、附属校に実施したアンケート調査の結果の比較をと

おして、教育実習中の大学教員の関与や後継者の育成に関することで、附属校と公立校に違いが見られたことを報告した。本研究では、北海道内の特別支援学校で教育実習生の指導を行った全ての教員を対象として実施したアンケート調査（調査 1）の結果と、北海道内の特別支援学校に教育実習生を送り出している大学（以下：養成大学）に行った調査（調査 2）の結果を分析し、北海道の特別支援学校で行われている教育実習の在り方と今後の方向性について検討する。

【方法】

ア 調査 1

201x 年 x 月から 202x 年 x 月までの期間に、201x 年度に公立校及び附属校で教育実習生を指導した教員 540 名に別紙（省略）の「教育実習に関するアンケート調査」を実施した。有効回答数は、368 名（回収率:68.1%）であった。

調査の内容は、教職の経験年数や教育実習生の指導経験などの基本情報のほかに、5 カテゴリー・17 項目について、

◎：「特に重視」または「特に感じる」

○：「まあまあ重視」または「まあまあ感じる」

△：「あまり重視しない」または「あまり感じない」

から選択する形とし、各カテゴリーに自由記述欄を設けた。

イ 調査 2

202x 年 1x 月に、取得可能な基礎免許、事前事後指導で重視していること、実習中の指導などについて自由記述の形で養成大学 16 校に調査を実施し、10 大学から回答があった。※本調査は名寄市立大学倫理委員会の承認を受けて実施した。

【結果】

ア 調査 1

回答のあった、368 名を教職経験年数 20 年以上群(196 名)と 20 年未満群 (172 名)に分けて、17 項目の回答について比較を行った。17 項目のうち、「教育実習生を受け入れる意義」のカテゴリーの「自分自身の実践の振り返りや進化」の項目で、差異が見られた。結果を図 1 に示す。

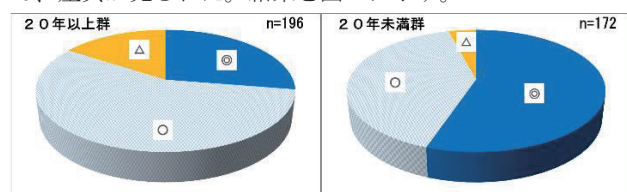


図 1 教育実習生を受け入れる意義

◎（特に感じる）について、20 年未満群が 55.2%だったのに比べて、20 年以上群は 27.5%であった。◎と○（まあまあ感じる）を合わせた割合でも、20 年未満群が 95.9%、20 年

以上群は、84.1%であり、優位な差が見られた。

(χ^2 test. $p < 0.01$)

同じカテゴリーの「後継者の育成」の項目では、◎（特に感じる）と○（まあまあ感じる）を合わせた割合は 20 年以上群、20 年未満群ともに 97.5%前後であった。

イ 調査 2

教育実習を行う学年については、3 年生が 3 校、4 年生が 7 校であった。実習期間は受け入れる特別支援学校の状況により、2 週間から 3 週間である。事前事後指導で重視していることは、実態把握や模擬授業、学習指導案や実習日誌の書き方などは各養成大学で共通しており、社会人としてのモラルや、個人情報の管理をあげている養成大学もあった。実習中の訪問指導は、1 校が 2 回の行っており、1 回と回答した養成大学 9 校は必要に応じてメールや電話で指導を行っている。

【考察】

「教育実習生を受け入れる意義」のうち、「後継者の育成」が年齢群に共通して高い割合を示したことに比べて、「自分自身の実践の振り返りや進化」が教職経験年数による差異が見られたことは、教員としての専門性の向上と関連させて考えることができると思われる。教職経験が 20 年未満の教員にとっては、教育実習生の指導は教員が自身の実践を振り返る機会となると考える。本調査では、20 年未満群の中に教職経験 10 年未満の教員 60 名から回答があった。学校の規模や教員の年齢構成によって状況は異なると思われるが、将来中核的な役割を果たしていくことが期待される教員には、早い段階で教育実習生の指導を行うことによって、自身の実践の振り返りをとおして専門性の向上させる必要性を感じることもできると思われる。

矢口（2020）が示したように、「大学との連携について」の「大学教員の授業参観の充実」について◎（特に感じる）と回答したのは、附属校が 53.6%であったのに対して、公立校は全 17 項目中で最も低い 9.4%であった。実習中の訪問指導については、養成大学の教員が教育実習のまとめとなる研究授業を参観して学生の指導を行っているが、その際に公立校の指導教員に対しては指導のお礼を述べる程度にとどまっていることが推察される。養成大学の教員が、指導教員に対して、教育実習を経験したことにより変化した学生の様子など、教育実習の成果を伝えていく方法を探ることが必要だと考える。このことは、ほとんどの公立校において養成大学の教員と教育実習以外につながりをもっていない現状を変えていくきっかけになると考える。

養成大学と公立校が連携を深めていくことによって、養成大学の教員は学校現場の現状や課題を把握して事前指導に生かすことができると考える。また、公立校の教員は養成大学の教員が取り組んでいる研究の成果を知って実践に生かす方法を探ることが期待される。

【文献】

矢口明（2019）特別支援学校における教育実習の充実に関する研究. 日本特殊教育学会第 57 回大会発表論文集

矢口明（2020）特別支援学校における教育実習の充実に関する研究 2. 日本特殊教育学会第 58 回大会発表論文集 (YAGUCHI Akira)